

考察編 一 仙台城二の丸跡の考古学的調査一

1. 仙台城の考古学的調査の歴史

(1) 仙台城の概要

仙台城は、本丸、二の丸、三の丸からなり、遺跡登録範囲は、二の丸北側の武家屋敷の一部や三の丸東側の追廻馬場を含め、約10万㎡におよぶ。この城郭は、仙台市西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺とその裾にひろがる段丘の上に位置する。その地形は、広瀬川の形成した3面の河岸段丘がいく筋もの沢で開析され、複雑である。

本丸は、標高115～140mの青葉山の高位段丘面にあり、東の崖下を広瀬川が流れ、南には深さ90m程の竜の口溪谷がのびている。西には、標高120mを越す青葉山丘陵がひろがり、天然の要害となっている。二の丸は、本丸の北西、約60m下がった標高61～78mの中位段丘にある。三の丸は、さらに一段低い段丘面に位置する。青葉山を背にした防御性の優れた城郭である。

仙台城の東には、仙台平野がひろがり、ほぼ中央を流れる広瀬川の流域には、古代の郡山官衙遺跡、陸奥国分寺跡、国分尼寺跡などがある。さらに北方、20kmほど離れて平野の北辺には多賀城市浮島、市川に国府多賀城跡、その附属寺院跡などがみられる。周辺には、岩切城や新田遺跡のような中世城館跡も遺され、古代から中世、そして、江戸時代へと都市的景観が一貫して保たれていた集住地域、文化拠点といえる。また、奥州街道に沿った交通の要衝でもある。

本丸は、慶長5（1600）年に伊達政宗によって築城が開始され、慶長15年には大広間が竣工し、その完成をみる。本丸は、東西135間（245m）、南北147間（267m）の広がりがあり、大広間を中心に、御書院、懸造の眺瀛閣、艮櫓、巽櫓など多数の建物群が設けられた。

そして、二代藩主忠宗は、寛永15（1638）年に幕府に本丸下の「屋敷構作事」を願いでてその許可をえ、二の丸造営に着手する。ほぼ同じ頃、三の丸にも多数の蔵が造営され、御蔵屋敷が設けられる。二の丸は、17世紀中頃には北側にひろがる江戸時代初期の五郎八姫の「西屋敷」を整地し、その敷地を拡大し、元禄年間に最も整備された様相をみせる。その後、火災、地震などによって、造成、改修が繰り返されるが、その主要構造は、幕末まで大きく変化しない。

これらの二の丸の建物は、明治15年に火災で大部分が失われた。さらに、昭和20年には、明治15年の火災を免れ、最後まで残っていた桃山様式を伝える大手門が戦災で炎上、消滅した。

(2) 仙台城調査の歴史

このような仙台城跡については、正保3、4（1645、6）年に作成された「奥州仙台城絵図」（斎藤報恩会蔵）をはじめとして、5つの絵図が残されており、城郭の構造とその変遷を知る

ことができる。城内の基本的建物配置については、これらの絵図が極めて有効な手掛かりである。これらの絵図をもとに、佐藤巧東北大学名誉教授によって精度の高い仙台城復原図が作成されている（仙台市教育委員会編1991）。二の丸の考古学調査には欠かせない重要な資料となっている。しかし、仙台城の大部分の建物については、正確な建物構造、位置、その機能、そして建物配置の変遷を、絵図と記録文書の調査によって復元、再構成するのには限界がある。的確な発掘調査による遺跡構造、その変遷の把握が欠かせない重要な作業といえる。

仙台城において考古学的調査が本格的に開始されたのは、比較的最近のことである。昭和43（1968）年から、東北大学文系四学部と附属図書館の川内地区移転が進められ、その移転にあたって仙台市教育委員会が施設建造予定地の小規模な調査を行っている。ことに、文系厚生施設建設予定地において、焼土層のひろがり下から江戸時代の溝跡を10m以上にわたって検出した。また、瓦などの遺物が多数出土することを確認している。さらに、昭和53（1978）年には、川内教養部のプール協排水施設工事の際、東北大学文学部考古学研究室によって芹沢長介教授の指導のもとに、発掘調査が行われ、武家屋敷の井戸跡などの生活遺構が発見された。

これらの調査で仙台城二の丸跡には江戸時代の建物、井戸、水路、溝、庭園跡などの遺構が、比較的良好な保存状態で遺されていることが予想されるにいたった。

昭和48（1973）年に、仙台城の東南、経ヶ峯にある伊達政宗の霊廟である瑞鳳殿の再建が計画され、それに伴って墓所の学術発掘が実施された（伊東信雄編1979）。瑞鳳殿は、江戸時代初期の桃山様式を伝える優れた建造物であり、国宝に指定されていたが、昭和20年に焼失した。墓室も地下の亜炭層の乱掘によって地盤沈下を引き起こし、破壊寸前にあるとみられ、保存処置の必要性が指摘され、霊廟の再建への希望も強まっていた。再建工事にあたって、伊東信雄東北大学名誉教授が指導にあたり、入念な計画をたて、調査が行われた。

この調査によって、政宗の墓室の構造、埋葬の方法、状態、武具や、蒔絵筆箱、筆、鉛筆、日時計、ブローチといった政宗の愛用品などの副葬品、遺骨の所見が明らかにされ、考古学、人類学、文化史上の重要な学術資料となり、その成果が公表された。その後、二代忠宗の霊廟、感仙殿、三代綱宗の霊廟である善応殿の調査も同様に進められた（伊東信雄編1985）。歴史的に重要な三代の藩主について、世界的にも稀有な学術調査がなされた意義は大きく、江戸時代の考古学調査の重要性が認識され、積極的な評価をうることができたといえる。

昭和53（1978）年、東北大学では二の丸地区にある図書館の増設計画が立てられ、それに伴って二の丸西北部における広域調査の必要性が生じた。当初計画でも2000㎡をこす調査地には、伊達政宗の長女五郎八姫の西屋敷跡と二の丸拡張部（中奥）が重なりあっている可能性が強く、大規模かつ高い熟練度を要する調査が必要と予想された。本学文学部考古学研究室によってその調査体制、調査計画の具体的な検討が行われ、事務局への説明がなされた。

昭和58年、二の丸西地区における文学部、経済学部合同研究棟の建設にあたって、先の文学部の調査体制の検討にもとづいて、埋蔵文化財調査委員会が設けられ、石田名香雄委員長のもとにはじめて構内遺跡の発掘調査が開始された。この委員会では、当初、構内遺跡の考古学的調査についての計画立案、調査、検出遺構、調査内容の評価、検出重要遺構の保存、出土遺物、調査資料の整理、分析作業、関連資料の収集と比較検討、そして、報告書作成、出土資料の公開と活用といった複雑な埋蔵文化財調査の流れに十分に対処できるシステムを検討し、その構築方法と考え方を明らかにし、慎重に調査に取り組んでいった。これまでに二の丸で15地点で比較的規模の大きい調査を行い、全調査数は、大、小取り合わせて100件を越す。

昭和58（1983）年に調査された二の丸跡第2地点では、政庁の中枢部である小広間の北西隅の廊下と小庭石敷が検出され、建物遺構がきわめて保存良く埋没していることが確認された。

昭和60（1985）年には、二の丸西南部第6地点の津田記念館の建設にともなう調査により、二の丸の西側を区画する大規模な石組み溝が検出され、城郭の周辺の実態が明らかにされた。

この年、懸案となっていた図書館増設に伴う事前調査の試掘が実施された。翌、昭和61（1986）年、二の丸北西部の本調査が行われ、1700㎡におよぶ範囲が精査された。この調査で7枚の文化層が整地土を挟んで複雑に重なりあって検出された。ことに上層では二の丸拡張時の門柱、土居梁などの遺構、建物群が検出された。また、下層からは西屋敷の長大な建物群、複雑にのびる苑池遺構が検出され、江戸初期の貴重な武家屋敷庭園と屋敷遺構が明らかにされた。また、木簡が出土し、生活物資の動きについて知ることができた。

昭和63（1988）年に、構内遺跡の調査量が増大するにつれ、東北大学埋蔵文化財調査委員会のもとに東北大学埋蔵文化財調査室が設けられ、調査体制の充実が図られた。

平成2（1990）年、埋蔵文化財調査室は、法学部と文学部の合同研究棟を建設するにあたって、その事前調査を実施し、上層では二の丸東北にある台所御門西側の一面を明らかにした。下層では伊達宗泰の屋敷跡、西屋敷との境界となる東西堀を検出し、豊富な遺物が出土した。

昭和58年には、仙台市立博物館の改築にあたり、三の丸跡の調査が仙台市教育委員会により行われ、三の丸が寛永年間から藩の米蔵所として機能し続けたことを裏づけた（仙台市教育委員会1985）。それとともに、この地に当初、政宗の別荘、茶室と推定される建物群があったことが、遺構と遺物から明らかになった。それ以後、大年寺惣門、北目城跡、養種園、南小泉遺跡の武家屋敷跡など、市内の近世遺跡があいついで調査された。また、宮城県教育委員会によって、茂庭綱元の屋敷、五郎八姫の仮御殿であった仙台市下愛子の西館跡（宮城県教育委員会1987）、茂庭氏の居城となった松山町上野館跡（宮城県教育委員会1993）などの調査が行われた。このような調査によって、近世の仙台藩に関する考古学資料が次第に蓄積されるにいった。

(3) 仙台城跡の考古学的調査の結果

これまでの仙台城とその関連遺跡の調査で、次のような点が明らかになってきた。

- ① 東北大学文系キャンパスに、二の丸跡と御勘定所跡など、仙台藩政庁とその主要施設の遺構が高い密度で、複雑に重なり合って遺されている。
- ② 東北大学川内北キャンパスには、上層階層の侍屋敷跡が地下に遺されている。
- ③ 二の丸地区は、表門である詰門から玄関、小広間、書院、御寝所など、仙台中枢施設の大部分が極めて良い保存状態で埋没している可能性が高い。
- ④ 度重なる火災や大規模な改修・拡張工事で、整地、盛土作業が繰り返され、遺構が厚い整地土に覆われ、また短期間で埋没しているため、その保存状態が著しく良好である。
- ⑤ 二の丸、侍屋敷跡の多くの建物群跡で、整地土、包含層、生活面が層位的に重なり合っており、遺構、遺物の時間的な変遷が明確に捉えられる。
- ⑥ 段丘上部から豊富な湧水があり、地下水位が比較的高く、漆器、木製品、木簡、植物など有機質資料がよく保存され、多彩な生活資料を精緻な調査によってうることができる。
- ⑦ 陶磁器、瓦などについても土壌に廃棄された一括資料が豊富に遺され、近世の物資の流通、消費形態を明らかにできる貴重な基準資料が多数確保される。
- ⑧ 遺構から出土する動物の骨、植物の種子など、豊富な自然遺物の入念な分析によって、仙台藩主周辺での生活様式を追求することのできる新たな手掛かりがえられるようになった。

以上、考古学的調査によって、従来、文書史料と伝世文化財の研究によって再構成されてきた仙台城の歴史はより豊かな膨らみをもつこととなった。仙台城二の丸跡では、東北大学文系四学部、附属図書館の移転、その後の増、改築で大規模な破壊が行われたにも拘わらず、なお、二の丸建物群が大規模に、かつ良好な保存状態で地下に埋没していることが確実にってきた。今後、この二の丸地区を早急に組織的かつ慎重に調査し、その基本的な構造を確認し、貴重な埋蔵文化財として保存の方策を構築しておく必要があると考える。

《引用・参考文献》

- 伊東信雄編 1979 『瑞鳳殿 伊達政宗の墓とその遺品』
伊東信雄編 1985 『感仙殿 伊達忠宗 善応殿 伊達綱宗 の墓とその遺品』
仙台市教育委員会 1985 『仙台城三ノ丸跡』 仙台市文化財調査報告書第76集
仙台市教育委員会編 1991 『甦る遺産 仙台城 現代複合図』
宮城県教育委員会 1987 『宮城町西館跡、利府町郷楽・天神台遺跡』
宮城県文化財調査報告書第123集
宮城県教育委員会 1993 『上野館跡』 宮城県文化財調査報告書第156集